

グレン・クロース

恋する女の心には
ひと
ヴィーナスが棲んでいる。



アカデミー賞プロデューサー、デヴィッド・ハットナムが「メンフィス・ベル」に続いて贈る。

MEETING

VENUS

ミーティング・ヴィーナス

ワーナー・ブラザース映画提供

エグニマ・プロダクション グレン・クロース ニールス・アレストラップ "ミーティング・ヴィーナス"

脚本イシュトヴァーン・サボー&マイケル・ハースト 製作デヴィッド・ハットナム 監督イシュトヴァーン・サボー

DOLBY STEREO

共同提供: フジサンケイグループ サントラ盤 ●ワーナー・ミュージック・ジャパン



ストーリー

〈STORY〉

無名のハンガリー人指揮者ゾルタン・サントー（ニールズ・アレストラップ）は、パリのオペラ・ヨーロッパでワーグナーの名作“タンホイザー”を指揮するチャンスを握る。その演奏は27カ国に衛星放送される。成功すれば、彼は一夜にして国際的な有名人にのるのだ。失敗は許されない。

“タンホイザー”には、ヨーロッパとアメリカの優れた顔ぶれが出演する。その中心人物は世界的に有名なスウェーデンの歌姫カーリン・アンダーソン（グレン・クロース）。だが、サントーに対してカーリンは冷ややかだった。それどころか歌手、演奏者、ダンサー、裏方が彼の指揮棒のもと一体となって美しい音楽を紡ぎだすという夢はたちまち崩れ去った。誰もが音楽なんか後回しで、マネージメント側は権力の奪い合い、ダンサーの労働組合はストライキに入ってしまうし、歌手はお互いつまらぬ嫉妬の応酬……。こうしたお家の事情で、リハーサルは絶望的な様相を呈していた。

サントーの焦りと苛立ちがピークを迎えるとしている時、突如彼に嵐のようなできごとが降りかかる。恋に落ちたのだ。予想もしなかったこの恋が、彼の人生を180度ひっくり返すことになった……。



スタッフ
監督……………イシュトヴァーン・サボ
プロデューサー……………デヴィッド・バットナム
脚本……………イシュトヴァーン・サボ
音楽……………マイケル・ハースト
キャスト
カーリン・アンダーソン……………グレン・クロース
ゾルタン・サントー……………ニールズ・アレストラップ
ジャン・ガボル……………モスキュー・アルカレイ
ピカビア……………エルランド・ジョセフソン
マリコフ……………マーシ・メリル



MEETING
VENUS

音楽ジャーナリスト 石戸谷 結子

ミーティング・ヴィーナス

WARNER BROS.
A TIME WARNER COMPANY
©1991 Warner Bros. Inc. All Rights Reserved

奇跡のように「音楽」は生まれる

華やかなオペラ・ハウスも、一步裏側にまわれば、たいていこんなものかも知れない。20世紀も終焉を迎えるとする現在でも、パリのオペラ座もミラノ・スカラ座もウィーン国立歌劇場も、舞台の裏には「怪人」こそ棲んでいないけれど、策略と陰謀とスキャンダルが満まく、魑魅魍魎の世界だ。ひと癖もふた癖もあるスター歌手たち、何かと言えばユニオングを持ち出すオーケストラや合唱団、権力争いに明けくれる事務局。そんな人間同士の葛藤の紛糾の中から、奇跡のように「音楽」は生まれるのだ。

「ミーティング・ヴィーナス」は、パリのオペラ座とおぼしき場所で、ワーグナーのオペラ「タンホイザー」が初日を迎えるまでの、紆余曲折を描いたドラマだ、という見方もできる。欧米各地から集められた「個性的な」スタッフやキャストを1つの目的に向かって統率するのは、自由化されたばかりの東欧、ハンガリーからやってきた指揮者、ゾルタン・サントーだ。目指すは「音楽」のはずなのに、サントーの理想主義など、西欧のオペラ座の舞台裏には通用しない。それどころか、彼自身予測もしなかった事態に巻き込まれてしまう。主演のブリマ・ドンナ、カーリン・アンダーソンと、激しい恋におちてしまった

のだ。

突然の恋によって、ドラマは新しい進展を見せる、サントーは家庭と恋の間で苦悩する、まるで「タンホイザー」のように。

ワーグナーのオペラ「タンホイザー」は、清純な乙女エリザベートと、官能と悦楽の女神、妖艶なヴェーヌス（ヴィーナス）の間で苦悩する騎士タンホイザーが主人公。エリザベートに魅かれながらも、ヴェーヌスの歡樂も忘れ難い。しかし、道徳が支配する中世では、官能の愛に溺れたタンホイザーに、人々の非難が集中する。そのあやまちを償うためには、巡礼となって法皇の許しを得なくてはならない。しかし、その辛い巡礼も彼にはむなしい旅だった。タンホイザーの罪が許されるためには、エリザベートの死という献身が必要だったのだ。その献身によって奇跡は起こった。古い杖に操る芽がめぶくという奇跡が。

「ミーティング・ヴィーナス」の主人公サントーは、「タンホイザー」を指揮することでヴィーナスに出会うことができた。エリザベートを歌うアンダーソンに。彼女は、彼の罪を償い、救いの手を差しのべてくれる乙女エリザベートであり、官能の女神ヴィーナスでもあるのだ。そしてドラマでも奇跡が起きる。「タンホイザー」の初日、とても幕が開かないという状況の中で、奇跡が起こった。サントーの指

揮棒に、緑の芽ならぬ花が咲き出したのだ。

「ミーティング・ヴィーナス」の脚本家であり監督である、イシュトヴァーン・サボはかつてパリのオペラ座で「タンホイザー」の演出を担当している。その時の経験が、映画には生かされていて、オペラ・ハウスの裏話的な興味も、充分に満足させてくれる。そしてもうひとつ、この映画を魅力的なものにしてるのは、実際に陰で演奏している一流の演奏家たちの顔ぶれだ。グレン・クロースの代わりに歌っているのはキリ・テ・カナワ。当代のソプラノで、しかもボビュラーも得意。ポール・マッカートニーの新作オラトリオにも出演している。サーの女性形？ ティムの称号を、エリザベス女王から贈られた。タンホイザー役は、映画より10倍はハンサムなルネ・コロ、ライト・ブルーの目、甘く輝かしい声で、世の女性たちを魅了しており、ワーグナーの英雄役を一手に引き受けている。

その他、ウォルフラムを歌っているスウェーデンのバリトン、ホーカン・ハーゲゴールド、バイロイト音楽祭で大活躍のソプラノ、ワルトラウト・マイヤー、ワーグナー指揮者として評価の高い、マレク・ヤノフスキなど、クラシックの世界では、超売れっ子のアーティストが、世界中から結集しているのが話題だ。

10月19日(土)ロードショー
特別鑑賞券(一般¥1300/学生¥1100/ペア券¥2400)発売中

コマ劇場前・地球会館 4F

新宿ジョイシネマ2 03 (3209) 4338